



Title	新年度に向けて
Author(s)	関谷, 全
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 48 P.1-P.1
Issue Date	1983-02
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/65553
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

新年度に向けて

センター長 関 谷 全

ACOSシステム1000が運用を開始してはや1年が経過しました。利用者の方々にとっても、センター教職員にとっても、新システムへの期待は大きなものがあっただけに、このシステムが生みの苦しみを越えて大過なく立ち上ることができたことは、関係各方面の従来にまさるご努力の結果によるものと深く感謝致しております。

当センターの計算処理能力が限界に達していた1年前に較べると、換算された演算時間は2倍を越え、特にCRJEやTSSには3倍を越える伸びが見られるようになりました。しかし、現在、大型計算機センターは存在の意義そのものを見直すべき重大な時期に立っているといえます。

従来、7センターが7つの地区を夫々担当サービスするという体制から、7センターを一体とした大学間コンピュータネットワークが、有効に機能しうるようになるまでに問題が幾つも残されています。回線費の問題もありますが、大型計算機の一般的普及により、それがもはや大型計算機センターだけにしか見られないものではなくなっていること、特に特定分野の利用者のためには共同利用研究所等が独自の計算機を持ち、また各大学も学内センターの整備が著しく進んだことにあります。このような環境の中で現在大型計算機センターに課せられた大きな課題をあげると

- 全大型計算機センターの大型機が、大学間コンピュータネットワークを通じて‘センター群’を構成し、各機種特有の処理能力と各地区固有の情報資源が、その長所と容量の大きさを生かして自由に選択利用しうるまで成熟すること。
- 従来、センター経費不足分を利用負担金として徴収してきた暫定措置がもはやこのまゝにはできず、省令化して来年度より統一料金という形に改められようとしていること。
- 機種毎に段階的に性能が向上し、同時に利用法の多様化も予測できない程進歩の激しいこの分野で、利用者の負担を増すことなく料金の統一を行うこと。

があげられます。

当センターとしては、この地区のニーズに応えるサブシステムの開発、応用プログラムやデータベースの整備を目指すと共に、遠距離からの利用者のために、公衆回線の低料金時間帯を利用できるよう前年度よりサービス時間を伸ばすことも考えました。

より広い層からのご利用を期待して、センター教職員一同、努力を重ねておりますので、各方面からご忠言をたまわりたいと思います。